

双面 常磐津 全詞章

常磐津

木村ゑんふ 述

本名題『両顔月姿絵』

作曲者・初演年不詳

名にしおふ、月の武蔵に影清く、霞を流す隅田川、岸を分れば下総と、昔はいふて今も尚、よしある人の言問はば、ありのまにまに在原の、まめな心を都鳥、むれつつ寄する白浪は、瀬々に駆れてはつとして、伊達な浮気を渡し守
川流になつす姿も自ら、色ある露の水脚棹、さす手も遠き唐土の、五湖の景色はいざ知らず、知辺を松の名に愛でて、緑も深き嫩草、葉越隠れの二人連、来るを遣しと待居たる
待乳山夕越ゆくれば庵崎の、隅田川原に独かも寐んと、すさみしも理や、見ぬ唐土の八景はいざ知らず、はて面白き景色ぢやナア、それはさうと夫軍助の知せ故、此所へお出なさる松若様を、
先刻からお待ち申して居るが、どうして此様に遅い事ぢややら、ほんに待るるとも待身に成なとは、よいいふた物ぢやナア

暫し案じて作めり

恋には身をもやつけといふた、いふたいふたよう言た、其言葉を顰ぶにまかせ、徒歩や跣足で人目の関を、忍しのぶと売歩く、忍売る身は斯うも有かと、小棧をしようと川千鳥、千鳥鳴の名所なる、
隅田川原に著にけり、夫と見るより船より出で

ヤアあなたは松若様で御座りますか、大体や大方お待ち申した事ぢや御座りませぬ

ヤアおしづかいはの嬉しやうれしや早速乍ら聞いてたも、軍助が言葉にまかせ、二人共此様に、忍売りと姿をかへ、此処迄は来ども、道々も恐ろしい事のある条、コレあの寿娘は人手にかかつて死やつたわいの

聞いておしづも吃驚し、そんなら姫君様にはあへない御最期で御座りましたかいな、ほんに習はぬ旅路も、お許嫁の松若様に、逢たい添たいと思ひ焦れておいで遊ばしたものの、なんの未来も成仏なされませう、ほんに果敢ない御縁で御座りましたナア

と涙の中に、松若丸、懷中より吊紗を取出し

是を見てたも、又とだに思はぬ中の別れ路を、言葉残りてなほや恨みん、雅い時の別れさへ、許嫁の此松若へ、形見に送りし此一首も、今は未来の置土産となつたかいの

此世の御縁は薄くとも、御本妻と定まるからは、未来は添て下さりませ、仮の此世の殿御をば、私がお預り申して御座んすぞへ

肩身こそ今は仇なる其吊紗せめては安寝も暗るやう、煙となさば未来の門火

それそれどうぞ未来は成仏なされて下さりませ

南無阿弥陀仏なむあみだぶつと傍なる、岸根に焼くる葦の火へ、形見の吊紗打入れば

又も願悲の立登る、煙隠れに怪しの心火、現はれ出ると見えたるか、ためらふ暇もなかなに、おしづを始め松若おくみ、たた茫然と伏にける

白波の雲かあらぬか煩惱の、墮落にうせし法界坊、姫が魂魄さひきて、姿は二面、恨をここにありありと同じ出立のやさすがた

わしが在所は京の田舎の片辺、八瀬や大原や芦生の里、世を忍ぶ故姫御前の身で襦からげ、忍いらんせんかいな、買はんせんかにや、世を忍ぶしのぶの乱れかぎりなき恨みの刃に情なや、恨みもやらで

其人の、つれそふことの恨めしく、うつらうつらと迷ひきて、小船間近く立寄れば、松若ふつと心付き

ヤアそなたはおくみぢやないかいの

アイくみぢやわいの

といふに心も暗やらず、此方の二人を呼生けて

やそなたはおくみか、心がついたかいの

ヤア松若様、又恐ろしい事で御座んしたな

と言葉になほも恐気だち、おしづおしづと呼生けて

コレおしづ氣がついたかいの

ヲお二人で御座りますか

コレおしづおくみが何時の間にやら二人になつたわいの

何を仰有りますやう、どうしておくみさんが二人あつてよいもので御座ります、と言つづ此方を見て吃驚、暫し言葉も出ざりしが、やうやうに胸をすゑ

もしお前の名は何と申しますへ

アイ私やくみといふわいな

と聞いて此方へ立戻り、シテお前の名は

アイ私ばくみといふわいな

ほんにマア此方にもおくみさん此方にもおくみさん

こりやまあどうぢやと驚けば

エエ何のこつちやいな、私を退て外におくみがあつてよいものかいな

エエ何のこつちやいな、私を退て外におくみがあつてよいものかいな

イヤもう何方がおくみさまぢややら、とんと合点がゆかぬわいな、イヤ申しおくみさま、あなたは何時ぞや柳橋の大黒屋で踊初めのあつた時の振事、私やよう覚えて居りまするが、そちらなおくみさま、お前もよう振を覚えておいでなさんすかへ

それ忘れてよい物かいな

そんならここで見ようかいな

サア其振事は

其振事は

恥かしながら一寸小腰をかう取りて

尾花招けばうなづく小萩、何をくねるぞ女郎花、わしや可愛うてならぬのに、抑も縁が朝顔ならば、郭の女郎衆は見やせまい、開くを答が聞いたと見やせまい、サイナさいなさうぢやといな、人をしのぶの草隠れ、おしづもほとと持あぐみ

いやもう不思議といはうかとんと合点がゆかぬわいな、ヲヲそれぞれそんなら此上は松若様が、幸吉と名を愛て、おくみさんの所へ行かしやんした、其馴初めの睦言は、お前ならでは知つたものは御座んせぬ、サア其話が聴きたいわいな

サア其睦言の話はな、恥かしながらよう覚えて居るわいな

ハテマアこちらなおくみさまから聞かうわいな

サアそれは

過にし梅の花見月、目見へ初めと手をついて、ふつと見合す顔と顔、いとしらうて優形で

ほんに思はば徒らな、人の前髪何のその、嗜んで見ても忘れず、目先にふだん業平さんも、及びやせまい殿振りと、惚れて心で褒めて居て、ついたわけに成たのが、積りつもつて何時しかに、桃と桜の色鏡べ

罐遊びのささごに、二世の堅めと抱しめて、つい手枕のそけ髪、直してあぎよと髪挿に、お前の紋のさしこみは、癪といふもの初めて知つた、外の殿御の肌知らず、思ひ焦るる私ぢやもの、何の心が

変らうと、彼方へ引ば此方へも、纏れもつる糸柳、風にもまるる風情なり

おしづは夫と見るよりも、中を隔てて結柴の、こちらもちらも答の花

若木の薫床しさに、見とれ居さんす其中へ

内の子飼の長太奴が、阿呆の癖にいやらしい、稚遊びにかこつけて、捕逮感はんま千鳥、ちりてはしたふ藏隠れ、しじゅうをおしづが止めても、止兼ねたる妹育中、結び柏や振袖の、垣根に纏ふ鳶かづら、

離れがたき風情なり

誰とて思ひは同じ飛鳥川、瀬とかはりゆく昨日今日、修羅の苦験のはれやらず、名乗らでしれや我思ひ、じつと見る目も物凄く

松若様おくみの

恨めしの心や、人の恨みの深くして、刃にかかりし身の因果、生て此世にあるならば、いとし殿御と添もせう

アア可愛女と寐んものを、なまなか出家を遂げし身は、苦験に隔られ法心の、中立を忘れしも皆誰故ぞおくみゆゑ

私が迷ひは松若様、稚馴染の許嫁、未を頼みの甲斐もなく、思はぬ愛目二つ瀬川

胸に漲る思ひの淵

あさいは縁

深い恨み